實之巻三編

八雲書
三冊
光文堂

へ遠13
2.022
3止

木清

門へ 13
請 2022
巻 3

いろくよ
ムうど
くや
あき
煙の暮
永光

實之巻三編壹

鼻山人著

○エミあるゆよ経の稚子れ
郭て俳の妙ハ秀逸の妙方へ強て先
ゆうさ実何ふ何ゆう混雑の味あれが是
ゴ〳〵おもみがあのうゝふ大変のうゆや
出来たらんと東〳〵猶を押ちがゆ〳〵
内ふゝく俳の妙まの妙ふ對面あすゝ夫

姿の若き是まで一ト方なるべずはの人動き
の身のよるべなるべをさろうして親里春ヶ谷
へ分論雪の下なる男相ヶ谷の親彩く
も沙汰まーあーて氏大磯の里ふあーし城
止めこそ村雪ヶあ実の形られてついふ丈
恨とありむ色ふろうる姿もんぐらうとて
天ゝ丸の屋ゝ伸と知するぐろゝと
悔ーー孤を思びて考ーーくるもこれ偏へお

佐の姿ぐ解光なれば侍の姿も古切なる上
形のごく拾りひて居さる形ふ測ずもふさ
たびおとみふあい初て夕ッの志ぐらこまと
思れがいろまるのお記まーて蘭作混
雑まるやト同ふ佐の姿実恨も志ろくと
ーて今文みいあてらくぬるもあぐらおとと
さんのまのうんかくのとふりと一ト色のうき
あきを出ーてうえ世ろうるまで侍の姿も愕乗

母うえ様とさまとハトだろうもどろきつくゑぶき
又れぶゆゑの始末さるべくとお村がゐ
下のとゞ泣き情ふあいてるゆゑ母の
孫ひも叶ひしうくハ世無ふ事ハ無く
あゝお村さゑや下のときゑ〳〵のこゝ様ふ
世ゑを捨るとゑ世あれば侍の妻ハ無ふ
仲なくおろう出ゑ蓮ゑを振り結て又
夕ア世ゑ振りをあゝありとゑさまゝ

実意后之ノ二

ゆゑせてうまてさあらう仕ゆう様ゑ振ゑあらう
のふ様ひひゆと引ふゆしておれゑあるとと
いゑるゆうト猫ふせ乳来る泪をのこゝゝ人ゑを
和る峠へ出ういたるゆゑ〳〵メて侍のハアおまの
どくとゆうませうう世ゑさゑ〳〵まゝて
ゆ様ゑ乳ゑ世ゑの仕合世ゑなるゆトでハ
まゝたあう和ゝゑ引ゑ外ふ行ゆの仕ゆうゑ
ざぐうませうふ弱をゆスゑ今とあうてハ

こゝはあとくんの涙のこゝ孫やんぐ次第も
おぎりまぜん一旦まゝの縁を思ひ捨を
立ねくおこゝぐんぐあつれ貞女のよし
とまゝ入別女の縁とものべきまをるこぎろ
只の娘と母のひゝ子ぐ二生のあやまりくゝく
まぞくんちんくろうをしてゐ二世のちぎりを
反古ふせねんぐーのかゝけるおさとゝめち
変過ぎの出場の時五ぎくぐの不の方へ

実説石之三

おり出ぐーのゆゝけあり出屋ゝを
ゝゝくつきゝんとせーをト女のあゝ
ゝゝ仕ふ姫くつ作れて後よりおぐゝ身
ゝゝゝゝびつゝゝ作れて後よりおぐゝ身
コレ伊の次さんおまくゝきでーちぐゝ
まゝゝつゝゝまてまくの門ゝあんぞのゝゝ
うてーぐゝの丑のぎんまゝあくぞおゝ
たまゝのゝゝやあんまうどや羽歌ーヤト
ゝあゝ立てる大ぐくゝ不合樊のこゝ変ぞぐゝ

まるく、うけ付けてのをアラまるくヤアリ
貸かやの侍の妖どのおろくどのを捕へて
庵丁さぶきのしゝうんの的切り門ちらいで
あらうぞやまろく出あぶるいりのへうろく
よろしくまゐとおもんとする　侍の一ぶどうぐらまへ
すふあらくかさうまゐぞふあるとも見えい
まろく一ハテ見るひ不覚ぞの狐ふちろ稼どの
命あるもののきもひごまろ一出よ出

新しなせくと庵丁をうろふとする
侍の一ハ切り人方がそのやうふ却りてうろんな
すってもぞふめ出るさぬく渋ません彩
まってもおとゝさんを新しそはにふ活て
居らまゐませくと新しそくと
せろあの侍人表の方より入来る新ろふ
やすをうろうまろう表より書之人
御ふふ出ぬ庵丁をとゞ見ぬ六ゆ

お姉さん「さんおえ〜さん和〜も
今そこで出すぜ〜けのうろ淋ふびろう
綺〜ほど伯父信や叔母信ぐ出のれさら
どの出ろふ出〜ぐりませうト存じます
ト云ひて出るも来のどくなル万ニホニ三ます
可笑おまるでありほどそれおまさ
貸方の侍のさんが鶴さんざといふ
風体も笑の出たがまさう鶴さんが式里ニ

居るきさうも来あて〜ホノ人のコるほと
抽のつくい出〜たモシ鶴さんねこ面
見るのハるのハお〜もざろうやせん抽ぬが
今ニ来でおとさんと一緒ふ死ぬ出ろる
るのがあつちやア和〜どもが泣ません
ょろろ人動歯のお家のろ人でもあ来ん
の市歌きハどの出ろでありろト抽ぐ〜
ます吾多のろ人ふるはまされてどふ

〜て御ます〳〵を初め新さまうまず一親と寿
のうへ〳〵〜子へお兄イさん〳〵イヤモウ
ふ孝どころうそれぐらいさうぞうと
そんなるすをたべまふをずト兄ぢうへの
念仏でもまをぐ〜かて考るなさるが外
の者の〳〵向のうどんなふ貧るふの下
ろうろう〜〜ぬめつて居るぐらうト云人
〜て色〜〜捏害を解ていひ学やそれば

生まれ年月日二ノ六

〜〜ふ納めて〜て俗の〳〵さまうあらはるさる
いおつまを通て通ふ殺〜まをう迎もさの
身い動商の日法のいつそのるす坊
主とも主のうておとゝが善提でも吊ひま
せう俗〜〜アそれも入ふねるす差ひ身
そらで出家道世もあんまり出うさね出
〜〜あれば妻びありとらあらう入今ふ又
行の浅れさまるうまているもあうや

せうたとくいう程歌さてもあんざののが
稼生るのぢやアれ、お徐も俳あて仕上
るせく家へもんおさうでござうます俳
の女さんもあのひ切ってお仕上ヨあとこの
ひうでもあるいトはでハ立流ハ俳めても
とるハ赤ろ〳〵村吋雨涙の神やこれ
あまるお徐ハ雑ハ女きのうくらぬるをを
操ハ〳〵いとそハ恨こ俳ってそハたのこぐこの

果〳〵あれおろう次の乃より下女の
おろくがあやくアを出て今朝夜明ケぐさ
おとこさぬグ彩〳〵の墓て居る西そうと
来てるんでもはみを今鶴さん〳〵とで
けてくるうトおろうあるゆく夜ぶ明てうら
ゆる〳〵ト来うませうトヤたらいよ来
お行こちうアの姫まるを存じませうべ
あの世うまるでであらうこハさうぢう

ちくずを拾ひまたよりもくずを
出し拾て式四ちなるものをあきなひまた
のみと思ひ法入れおちらふたちや四の猪子
あり子れば伝の如く入る朔の混雑不可説
して コレ胡食いどんするのゞ猪の時斗が
外出て来ことい〳〵ふあふくがハイ〳〵先を
程より出さるのお猪立をして待て居
ひまもなくほふ立て行かゝる

実母死后三ノ八

天仲の町の茶屋の若い者で惣
兵の正吉がモシ伊のさんおめくさんの子
おろくさんが来ますが遣ッとアクていつの
アホウ坊さんホウすつて笠を冠
ヒコラヒコをたて伊ふくう行ますやや
したれをどつぐ拾ひくさんホウ〳〵
ムカウトいひなさんホウたトむくさん紐
紐のふくさホ包ミ〳〵抱を出し法ッて行

仏の妻子ども、まことずと中を離れて、
大きなる悪鬼あり。げにまことに拙くもう
ちつと押切りてうちあつるれば
いとぎおそろしきまでを聞きえるものの
文ないうちく
せめては俺のうちに稼ぎと一粒でも
まいくまちまづとや我身なるものの
ものもまもなくさずゆくびさく夜の

まのあたまくさのと一ぢとさんと見け
あるあるふ坊のひめ〜あ〜たまれ
憎きき殺し一ぢとさんのおり〜めの
と面目なくそれゆくふあそあとさま
たるものは家朋はとげあされ
うりまりうり物ふ〜〜鶏るき入り学後
ゴすれあり〜〜はまくさあんたぢめ
皆〜さあいうたらは鶏きの程を

はさまり中上ゝまつくるる兎ふ角秋
分ゆくふゆくび紙や悔くと知ずー色
ゆくんがま実ぞんせねるゆくゆくふ
ゆくふはゆくしもされくやうはなび
中上ゝりくー我多るゆも是ゝうへせるそ
尾とるさゆをうえおとみさゆの花弦を
とゆまつくるるりでかさるる飛ゆきく
まんとぞんドくふい弦和定めぬ

旅の夢ゝどゝは名残不今ゝ一度拝ん
新ゆ月さくゆくゆくゆくゆも迎ゆ武蔵は月ゆ
ゝゝ結されまゝくくとあきらゆ居ゆく
どゆ月ん月の縄のき月ゆらずはらひ
せゝるふんのゝちゝりやの素ゆすと
ゝふゝ段と扱ゆー色ちされくくゝ品
それのゝくんふゝりくゝ中上ゝ兎
はまゝくんゆゆの数くふゆくゆ

[illegible]
ずはしき若木とりあらうとと
[illegible]を愛のよう侍の姿も源氏物語
懐紙深あきもあるれもせぬ[illegible]
[illegible]名殺あ[illegible]まれて[illegible]
[illegible]のよう侍の姿もお線も[illegible]
[illegible]人合せて[illegible]
[illegible]の[illegible]

実意后三ノ十二

女ゑもトかんどへてぶ[illegible]ふる侍の姿い又
かくてもあるべきゑトハ物ひも書ず門
実ハおとこぶんの形ひも物ゑま線あるく
下ものとぶ厚き情ふよう寄ゑふ[illegible]ふ
あ[illegible]ー始末上女だ[illegible]お村ぶ恪言の[illegible]
遠ようる恐ロ雑云の光相[illegible]をいひ
るまで園境ふ[illegible]て[illegible]ふ[illegible]
也一上物りひ女ー物[illegible]の舎も[illegible]べし

はくに再び拍のひを殺すべうべく侍の妻も
お村ゆふまで動かぬまでもされど中あれ
ば今更又ふるべき女うもあるまじと彼が猶
中を推し是がんを為あるして深く斗
くらいばまでも侍の妻とあとくが中を避ん
あと一下通りの恥又あるべく妻まじと思ひまず
あとがんをもとめあとをも今更拍
程ふ為ふとも鶴ふあれお村といん

女だうもあれば迎も拍ゆるぬ吾身のうく
ト諦めて外あて今ひとり恋ねばきかぬ
のかうする又くれば恋ものそもあるも
あいば拍が谷のあしん中狭もあき仕合せ
ト拍のくべ女だうお縁ともそうぞんのうくあて
一下まづ侍の妻拍が猶中をさぐうんーうく
うら又然ふいうもあるべーその斗策は恋
あしとぞかくあしとぞトあとあるいひふくめて

自害して引んぎ物ゝをもて、さべ仕の女ぶ
ムもお村ぶ仏あ物も分んべ一弟ゝ下りとゞ深
実のそらひそのあのたぎを要べ一ふさまぶ
倡ぬの三きぬ地あるべ一いづまあ吾ムと
仏せてそらぶ〜ちやまつさるすべらべ
トあとゝをいさめてさて八自害せ一物ゝ家
門の者まであの云ふらさせるす十分たろり
ろ八佐の女ぶちぶうの和云あて四方八方

実毛后三ノ十三

とものあてゆゝ人あく納めんと扱ひ一ゝ
お村ハこれを涙と扱ひ也扱のれぶつこの已
弟せあてつゝあ制髪非ムのあとるゆ
るをきて上弱ぶき上あ一ゝ三ま上ひとゝ
吾方すの儀斗より鶴ぶらぶ身の仕合
トあつゝるすよトムの中あハよろまべども今
武場あるて明白ふいらんもものまりたゝ
るゝるゆつふまのどゝあ扱ゝいおとゝぶ

るゆめさそもへ〳〵作業へ〳〵モシ鶴さんかうまつさ
ふ〳〵うゆやアのりの仕様仕うるもありやす
めへ抜ゆへゆアノ女ゆまたるれるあさんぐちつと情
の極へ女ごがまアたきゆ志ゆ世ゆいゆんざ
それいまゼトいへぐ兎右うさゆも手志れ
世親孝方へたいしてのかんどう使でもあれ
倡妓とまゆ抜ゆまつて親兄弟の面戒
法すふ孝ゆのどのぞかんふ立ゆくッて

実事左三ノ曲

人ゆらゆ〳〵ゆのの抜らば人さゆゆん捨て
無てふゆさるまゆひとまへどうらきゆ親のお
ひさう抜ゆ〳〵ゆすおるれがまゆの縁も
さつさうきれてふふ引〳〵方ゆるれば動面の
徒云ゆ抜ゆすゆるのゆら氏徒の女ひざをぐい
てゆまて上れそのまで抜ゆへゆ縁ゆ見昔ト
待ゆてか村さんのるゆれを妻ひト抜ゆひ
切って付ゆ世へ俗の女へそれふりとようその

了覺ゑんぐおとゝく殊にして其安へハテ
おとゝさんのるすへあんどなさんをこうちぐ
いさわとゝ西でゝ西安すゝ安へるんぐ拾まく
さゝ女ぐお春西るされてゝ三右ゝさゝ女くゝい
して和しぐすゝませんトとゝうおくれてゝ涙
新知縁も今ゝへせんゝとゝるく〳〵まゝゝくゝその
ゝうふまんじるさぐゝとせゝてゝへおとゝさんの
ゝふかねまりとゝそ思ひ来ゝるせくト一ト

実者后三ノ十五

乃くとゝ西ゝ立さる屏風を抑羽れゝ中ゝ
おとゝさぐかいらぬ安伊の安ゝるよう御天
まゝ西ゝうゝ現ゝうゝせゝの拍ゝのねけ
ゝすゝて伊の安へゝ三てゝおゝやお縁さゝ女ノ
おとゝさゝへまんゝそくゝでありますゝるのコリや
ぐゝゝゝるぐでぐざゝうまゝすト吾分るぐ
らゝ毛立ゝて和ゝるゝず新をゝそゝでゝくゝし
ゝてゝあゝやぐゝへあゝてゝる和ゝぐゝんの迷ひで

おぢゝ[illegible]ますト自害して死んだ[illegible]のぶ[illegible]
まんそくで居[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
おとゝや[illegible]ずまつてゝまつぞ[illegible]
[illegible]れも[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ん[illegible]ま[illegible]女[illegible]ゝ[illegible]
も今い[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ず[illegible]ゝ[illegible]

此方の人のあつひ斗[illegible]おとゝさんの命の
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
方の命のう[illegible]
トゆゝ[illegible]
下りとさんのてまくも[illegible]
四方八方の[illegible]
かくおで[illegible]
此[illegible]

碧ヶ城さうさんさうでがつてゐんざと云
ふらさせ施まで拝まくを願きと義理と
情の相違ときらて侍の女いあきれまて侍
ハヽそんあらァノおとさんハ乱まずとゐる
のでござりますう侍の女へさうサ私も解り
相違をとうきすぎそお村さんのやうをきく
いふもしいそぬもたらしむさし あぶとえん
考くあり申た 都へハてそやア拝

宝暦五年三月十七

ざるのでござりますトさもあ行をつぶす侍の
ハおちさうきぬちどやアノおふくどんまでが
あふ法その 慈敬ゆへ私いまとふ天まと
拝ひまして あんな御あ山ゆめんぐく
あるのハござりませんざいふくそれが
実でござりますすれが私ちちくモウ
うまーいるのちやアあざりませんト都ろう
上ヶておとさが婆よりくそれがそれもハ

のりふかから丈なる黒髪おしげもなく
指ようふつと切ってあれがさるぐさまを
いとおどろきつゝコハ何ニゆへと問るこおとさへ
涙のひまもなきに〳〵今お村さんが恋
ふ実ゑんざト指ようんしてコさとしの
まゝ死なまでもとうんとあるおんばじあん
ず彼の女さまのはさしづまれがとそ人
我ざまをしてこのちさせ後日おしれさら

実者后三ノ十八

あんとせこう者なもとも不出家しく善
提のこもふのうたしとおのひつるるおること
彼の女行を改めて彼へアそれハ拙者への
了簡ちがひたこちアあくの私ニもせヨ
一旦自害してゑんざト言ふらせしくハ
何ハまでもゑんざ法のうしまそ赤子のハ
門徒ろの鶴さんのおんいっでハ場式
微セばうってめでこそ婚礼ハハ彼の女ガ

本清

蓬莱葉や
ぬまんで
捨る家の
ちり

椿井
重古

婚とあり改めて縁組あらためがきくも今日の始末があとのこころうどうをとるものをとりけるらひづんあとこの意ぞあるべしあるべし

實之巻三編一終

山東京傳作

雀春
永光
伸び
英松画

實之巻 三編 二

鼻山人著

○南ひの雅模無量寿藻
無尽岳の基根煩悩の郭善提ありと
彼の炎ハ大海に向ひ三昧で
和のひまがれて月日のわさ人見ぬ所の我
今と知てうるうるの泡と消なび苦労を
〳〵た早聖文もなる死多の仕合せ驚きんと

て色金を不切にして結ぶる恩縁をいん捨る
人もあるなさるべく候へ　まことに辛きびくの
世間の情天地の神を拵ひを立てるえ
捨る事いかぶぎうません今までおむくふ
うきされ〜人の義も覚束なく吾身の先
恋と悔み〜いとまる性のいさぎよ〜と思く
よろよひ合ひ夫婦仕ふ深まりて
深穿の契り深く閉毛同穴の語ひと

実事百二十一

二世成三世と拵ひ〜〜人の事の明の球
結といふものゝうゝそれも恋路ふ海ぬ出
〜きふ天合を出〜て身待をは吾恋
引連来りてまゝ母とまゝ女ぎうと呼
まちの人と呼れてそるすけ入恋ひ大事
ゆゝ就のるゆゝ恋聞まゝ〜して業〜るの
あるふまづ十人が八九人正のでふ中結びして
豆ふ豆をいひ敷〜結ぶ中離縁と恋

ふるす世るゑ
ふいとらもあるゆくさもちく
してせ遊をとれ樂ふるものハ古今稀
あるゝゝゝ信出されて妻問ひ者トハ
てハその色のさあるるゆ程まとられを
自然と表手もする者なれど女ぞうと
なれば上をる鼻のさもふぶらなく居
ゆくその色もちくさも安しかるゆを
一生その男と配偶まゝ倡妓ハ恥らく

百人ゆゝ八九人もあるべゝされを敢
慶安の頃ゝ風とした緑よりむら
きもぶ情ふ恨ぎ山られて命の色を居
をもうゝ不ず新ふ動尚を更絵さ
あさふ大後の男ふ私をさらて貧乏
盃の体のゆとさるゆを形しも村濃ぐんの
ま実を濃うゝるゝ絵うるゝも鳳ハ
ぎれど庄盃徒のゆが女ぞう お緑ハまき

しく妹婿のゆまれんびたとく勘当の
身あるとも捨て置ぎ遂死すると
彼の女不動めて彼れ計里ふかくまひ
傷るぶらせ活ま〳〵て居らしが孫父之
有つぶ娘のおとゝ離縁せ〳〵
より悪あらひふ始らて去親もんを
痛りお孫ぶ実母も一人の姪のるす者
べきもふ多のうくを案〳〵者や鼠とん

労しと保表のみのの足拵さん幸ひ
大磯の里の桜見物とて彼の女ぶ方へ
連れ来さう四五日逗留のその中ふ切そす
切まね恐縮と推辞〳〵是又持さえぶ
まい実へも又捨ぶ〳〵れ物〳〵どもの者と
情の慣の果ふ物ろふ世〳〵宇立の上を
潔もあるまじとこまのぐくま物のふんが
下のとぶ有まき情の斗らひを幸ひと

しそのまゝ不孝者邪正を礼ん
乃不斗時勢に保を与らせ一ぐるうちの
るる名あつてお村ぐ吾子より嘉記して
吾子を引〳〵鶴〳〵ぐる子の仕合せと
徒の如ようく親里義ぐ答まる来客や
義太夫方へ動尚の倦をこませ一ふ素
より〳〵親子の因恩生に忘れぐ〳〵往こ村
きもぐ子の〳〵人のどろ〳〵学メて今〳〵

徒の如ぐ倦ふ徒ひ動尚の親元あう
くれび鶴〳〵ふ絶てうき支親を始
り見ふ対面〳〵ふ来まる倡妓の色
ふ迷ひ子を放蕩ゆ〳〵たるふ孝の
羅を例〳〵今〳〵我慢の姿さて実〳〵
光那を悔〳〵百文くふ〳〵いひ倦く
りを西洋ふ傾けくれび雪の下まる光
右〳〵も鶴〳〵ぐ中んふ立飯し〳〵ん

再び五七五の方へ乗換を結ぐんとを
流しホンニ右衛門の娘も娘おとこぐ腐義
の死状ふ仮者ろうこまりれば是さん
ろんと死右ろうが河ふ捨りてさろそく鶴
ろうろ我方家ふよりび逢ひろる後て大孫の
庄五郎佐の妖もこ右ろう方ようおとこ式
貰ひ行て吾妹分とるし鶴ろふとあら
ためて婚姻をとろ結び四海波静く

五七五の家へ納まり名仮又六郎やの
死めろ也一ドのとぶる家紀ちとおとこ式
世居ちの也ろ姫来ろる俳ろホ分ろ附せ式
雛妖一ドあろろ分あるくトろ仮を出ろく
せろ多也帝きて今ハ足捨ぐき心意ド
あぐれバ又一ドのとも死めろ分外ホ心を
移すぐき客もあるく其実の形ろ式と
絶ホ表親の年ある入り実情ホハりば

らくもんぶぎょうそうとさろそく身侍の相
続して家ふり世間知らず邪みゝト
夫婦のさらばきも初舎人の新まら
おのとト名を吸茶睦まゝ〳〵ろ
縁まを侍もらゝだまれ一件氏ト内とが
親ぎとハ切り通しの朔比素さのお盃
縮みゝとの知ひ子ゆるもゆるね娘ざゝろ
五位ひの中間巡軍トいゝ考ふ覊されて

親のゆるさぬふ羽目ふ陸ろのの
横ゝて夫人とも女ふなるべき城善
提ふの和尚が今ちふより色平ハその
場ふおのゝ寺でしゝ子とまり仏いふ入テ名を
是空と孫ゝむ伝てその孫ゝと
大阪の里ふ妻ろれ倡婦とハなりふろ
係るふ妻の湖結ゝまれび焼ふ五七屋
三名ろが繁人ふて売ゝとえん組も

あべき約束なりしが是非もなきなり
扨もしらまゆみの母とそのうて
二せの契りの深きうらしへ偏くふ出家の形
の為らむる和なるべしなほ又お村へ
なるるなりの者業なや吾なるの罪
私入とあるや世なるべ命や世なるべと独り
思案ふそうらうらうらおとこが実朋の
やうす我変番とそもうらうらとぬるひ

下のとあ面目なく迷ふ氏野子豆を止
かがこと一曷ふ扨のひ迫うらればうら
思慕お切りて罪障懺悔のでびん
一通の出番を狂はして豆ぢやふ大後の
野を立退ふさすが奥情のあれの
果意幸花を捨ぬんより扨のひ切らる
逐世の姿ふ入うふ偽つべきあーんもあく
思案と扨のふ兄一人豆もそのむう

朝比奈三郎の住中死あてゐ長いさごら
の袖ゝより 今の代り不安 した永く
仏界界ふんをとよせ今ゝ浮世の業をる
を避てくいわざ死のちの乳あゝ あや
しの業報を結び今仏一三昧の弱
者とあり居るよう居てゆメ拝のび
ろべ吾身もさもふ同形と彼 光へこゞ
移いて 見物雖ま〳〵 変ふすそ

竹美五郎左四ノ八

亡々の善提をぞ吊ひる涙不義の
世の中あるゝな時日まで面不京ぞ〳〵の
仙女香を彩うゝ死世の色〳〵仏やろ世〳〵
身ぐるゝ仏の牧と知て墨の衣と雖色
の邪念を鄭氏管後世の一大るゝ形よ
身とあるゝるゝ又あり雖きるゝあゝ
ろ千う氏道不入るゝ宿業の果と高る
トいくどもいるんや若ひ身をら不拝の

きや然るに兄といひ妹といひ仏果の
妻子いとらるる他不幸なる死を知と
わかえを捨すす勢徳あり一子出家すれ
べ九族天不生とといとる不動明王とも
仏果に入りねるとく亡あんを宛めて
天上の果を知んるる影ひまるーいよく
新母ーくを扶りまるるの人出るを結る
母同ーの兄べの兄いづまる秋不孝で果

ぶ死と被抵王御女ぶ六条の火宅城
出て涙滅の果の塗炭ふる死亡の
墨を避るるお村ぶ今の御のひまぞ
ちくれ久ーるを不知のくく彩ぶ谷の青雲
砂をちーぶ雲の下なる六郎を掘ぶ
谷の五七登又大夜の庄屋他の父ろる
ある追くーる子勝多城生ーて上下和
合の化を表いづまる月出る父を向へ

る是実不一時の戯事不美迹なす
物事もとゝ和村雲の絶なゝるゆゑに
いとも扱ふを契情のあるを身をとろ
る動のごとゝそもの義理不かゝらまし
その情ふよりて実をとゝするのあれば
一擬ふ実をのゝとものいひごとゝ実
とも不羈とゝのあり絆とあつて客の身
我責るゝ地獄の鬼のごとゝあるひハ

ハ一度死のゝぶ命釈ふ痴癡の去来
楽を兼ねて三毒の強種ふ泥み刹ハ
中間の底の睡ふ生死流転のゆめ
現八雑の善ゝとまねるゝ男ゝ
生涯ふれゞ乃ふ傳伶りのとまるゝ
浮ぶ漸のあれふ倡妓といつて鹿の
めゝまのす業ふ業車の乗るを見て
後車のいまゝめまゝんなず迷ふのハ

大きなる獣子あり 擡掉と和うつ流れ
桝ふ事る間あり〜どう事る麁猪らちらして
後ふ事を悔れとも初の差ちあらん
物ぞねさ死の枝あを行要とあるず
〜も迷つべらずぬ捉びに一時の動きと
〜とその母もあるべくれ女ぶ驚らまずば
その恋を生〜実を結ぶの時を結て
あををあれい面白〜まる〜其よく〜

宝永元年 石四ノ土

〜夜を独り通り行くふ人と陶朱
公の子分たりとも続〜来きひ来して
ま〜いるんや系宣憲がとるらふ和ぬて
をや悔るべ〜慎〜むべ〜ト飛石走
ぞういはまじめあて若をと山より 三年ね

さきをすくふ作者の心得方極意
あまけあを如くらいの

○さて君恋をして差うは時のたまる〜
今ハ秀眠子の家の抱ひのおあうん

ありしがむかし辻行者といふる色おとこて
ゆくゑしらずとて氏客あるべいつとぶ
人の中の情をもとるものあるとのあ実
まことくも拙なびざる程をすり世に絶ふ年
の明のを待とく家ふ引注是来さう
女だてとあるくる作業もその比辻氏と
悲哀の気あれべ上をる出入とて実に昔れ
あるをけらとト苦悩の吐とあどう形

実説后四ノ三

不解てふいひ出せるるもあるくるの
附ちおうんのいつる地のそ契情程ん
の風しきめのへあらと吾多も氏家と
来さうて郭まと取とあるしうんの行をう
居るまいくせんやを来明てゆくべを
きえもうる遠ひの傳伝べ人ふ変人ん
トゆりくべ楽くく女だうふあらんト程ひ
城立て約束せ客以上三人あしと

いろ〳〵雑談していろへそれまでそうん
まりの〻打まゝ人まの〻人情を云い
出一人をまゝて今とゝ哭むつきをこ人追
ト小解う情ゑのきまゝとへト問ふそれも
まゝるゆまれども毛シ一人を的ふてふ完
の寺の中ゑの寺ふいろうん勢うある
とても給方まの〻かるゞゆへふ大丈夫を
斗らゞ毛シ氏人ゞ外まのゞ氏人よトハの

中ふ兄人情〻て寃恵ハ教てうふ
つゝりのあハあゞとゆきれうう寺家
ゆりゝゞ悦惚られてもゆへさふ神影の
まゝねのゞ笑情ゑの
今ハむしあるゆあらん方のうちよゝく
客人のうちさとうゞくあう山を梦しふ
まゞ月代の剃立髪の結立れあう
業ゞ為〻て勉〻二日目ゞらのおゝ

髮も艶の抜くるおびよりすそ長く
流れをるのとすれども撫子の付くる
まりぶこえ美しきたくさん結袖の深色
みもせよ紙くもれ后付くる結綿ゆか
城ゝゝよくもれるろふ樣まろくく懷中
りの烟管美美岩入ればいくふも奇異
かりて抜くゝ紙入あごふ自ひあるのゝ
きをすゝ まりぶ嬢深あるて初こう

まるも后四ゝ

髮形のうちに長口なるも足徹らい
抜ゝらまくく抜ゝひ付匠ふぶ長て解
さゝ多美まるも安くくて抜らるのの
まりたのゆゝ形の容姿艶美変
ふ徒ゝくは粉を多く利ず向をたゞ
うまゝぶらせるもまるのきを丸一とす
ぶゝ先とく我まふへふぬ老のゆゝて
後で弱るいもれて向よのまふ自ゝの

あり初命をあらそひて命を方へ分て
上すへ別〳〵に成ぬ又ゝ
幾らとなくあらそひ初命のゆゑ
ゆゑ沙汰く呑ざる接ちやう家ふへうて
仮程略可とあるとも離来たるすぐ
すべうらずいうふも大接ふ不ふせうひて
小遠をのうるをいとをきれば物のづうら密
の威あつと命方も義事あへたるね

宝永元年辰四月十五

ふ仏トクんあるろくな接拔ふ母物やもせん
方をのく命を書せる送りあればすぐく
とて後うりそのの日も暮るてすぐ死の
まうふ法を立詮々の吉凶二度を吉
する相屬の吉ならば死離ふ潜む亀男
上目と侵めば行ちく今家ならぬ故合
ぶ親ひたち人命をずと都さへ見れだと
意体ふをいとられてとれいまうどふとも

結ぶ引上げられら後
の金曲さんざん毒の食を調立て
男ふ金まのど孫らし見るのあいあらず
昔る能ぶ母ぶ毒ていのさ毒ん愛
もせず色男のあのあ和恩さんざん
工面のするの毒ぶふ婚のゆう方の道
どもの道喫情の毒見れるれば殺
て悔むべうぶず

実意唐四ノ三

今んむしある和ならんの懺悔を色と恋て
ぶ骨ある男の形容も毒ぶ忘て
んふ深ぎる客初金ふ来ようればりと
より勉むべきんあくもあくるの産義
ふて赤さう抜び見を結て家こいう
癪ぶ痛むと云沢して来待あぶらも敵
脊中をつんせく病を明せーぶ泣きあく
男て猛も立ず立悔うて又喪と来う

多る初食すら始まる物のうら表
とそもぶ食歟ホーてゆ桑〳〵も達く
書付ず独り藤して為せーホ伝とうも
あくく又三食目ホ来さうられば今ちの八
家苑の弱ホ迷ひて食る歟ぜーとおも
ハ且といふ〳〵ハとおりてば成も
独り家を明きも絶為せーば客いろある
ハ人あるしや七ちまで来さうち絶ホ

[illegible]四ノ十八

一度も家ホのうるゆあ〳〵解う来のどく
あれども客ようハてとをうをまうホ
まう〳〵客も慣〳〵ふずあると元
事柄の言れ大のる事也い推いうずとも
言ーうゆく氏客懐中ようを十文
表出ーそこレい実ホ御つまる今ちの是
ども言ますで別漬て来さうし吾す志
なれがあ〳〵も言ちまくを納やとく正

月の跡先の見あるものゝと後の
上へ乗られゝ時はあらず多くは長く
てねとといつべき物もあれどもとよう
入用の時幕あれば花を思ひて是
までの姫を尾実の正法を
ぶふ解るお情トそゝ義ゝほも長く
く文ふ是姫をも奏まゝずそれよう
二せの業う法うらず実を明しる

羊ゝといつて歩
貴つのへ好じたるものあぶれざる
でえもの長つべきあいあられども
きは人今さく物のひも書ざる情よう
てこぶう十あぶくの金をれども人の中と
大金ようも思れるとあう是を思ふ
時の業情といへども人情と筆理と
絶奏まつて居るものあるべゝすべき

きうん
手拍子よく通てべ拍の法ゝ実の形
わるゝ影ひゝ悟るべし〳〵

實之巻三編二終

東京吉原四ノ二十

楊太真遺傳
精製綿の箱入
上處女香
一匁
百二十文

[illegible]

書物繪入讀本所　文永堂　大嶋屋傳右衛門

初みぶり　代二十六文

為永春水精製

本清

寶之巻之編之

鼻山人著

○清あめや浜ふねあふ栖まぐら
今はむかしの戸町二丁目大上絵あと
のくるの鄙中ふ吋めて仝盛双び
また俱家ちうしぶ色あるものいうまぶ
喜べ光るあるものの絵ふ消めるうれ世の
ちひとて円光没落して分上分散

なりし時揚屋町のまるが屋といへる
貸屋渡世にて大うづき屋に多分の
貸金ありしより分散の一埒に給方
きく百貫の欠あり是一ヶ月の給方の
ぐく家に抱へ置る抱女郎とも
部合十五人殺ほ屋に引出る素
より美麗の玉ある合ざれば出く
拵せて登せて置べきあるべきと見一

実三下ノ一

安尚 風流に伊勢の元芸能
開き一人の紛に彼抱女をゆづりて是
城松金屋一九といへる流に二代目 揚巻
まぐも元亨ぐその弟市川八百蔵岩井
半四郎 揚巻助六の物語を元祖とする
先代に御贔屓中 豊屋元祖の
芸を中興する所に美者の抱入り難貴の
入用殺〳〵きに流石二代目揚巻が自

力ふ乃び難きなれば病身といひ立ち地
の悪い形うきれども和合中 祝の日の
傘ふ十本ばかり中村屋へおくりる
家ふ扶のく 松金屋の評判 江戸中へ
流布して方客の扶のひ法き 年〳〵
絲場ふ今 繭の売を嘆せる 去年が
抱へふ高男戸と云る 拒女あり 素性へ
都 姉が小路の生れ〳〵 ふのさ〳〵

伯父うる老ふ貰れて江戸へ来り 下谷
茶屋町の辺ふ住る 伯父何某ふ
造化して 別上ふ 恵と 〳〵
大上総屋い 和吉の 番 あれば 門〳〵
娘を貰入して 多ふの金を 借借しが
西海の朝月 延〳〵と 懐むべ〳〵
絲ふ高男戸と 呼る 伽妓と 〳〵
されば十 のさ〳〵 都ふ 在つ〳〵 伯

今はとなりて抱き寄せ給ふ連枝の君も
嘆かるべき御心ばへ墨田川の浮つ柴とかや
茶の湯の水に書きの小路をまゝび出でて
青梅の枝あれば自ら泥中の蓮の
ごとき美徳を風土の変化に自然と
泥まれて色を染まる契情のまりといふ地
戎蟹き合ひ名ようより花女の戯れと
いへむざ出を砂して後の代の記念とな

実三下ノ三

きぬ元来卑しもくづめの和歌まれば
いまゝの源氏物語やまくらのさうし
引くらべ屋紀のあれあふび兵一時の戯れ
不我物ゝ作の後さ紀をもたびふび出
紀しられば彼小唄の通女が洋ろり振
の旧るまも考うるようまうまれ
ぶも狭客の続あれ頗づる教養のまり
みも ぬんべきうと今とうふ写しかね

○世の中に拙女わど慈しみ過へ
あるじ人に教へ慈悲の心に
強多の客を歌舞して毒に酒を
貪りて清老は究の繋りも黄金の
光り落されば自然と乗り乗ふ
ようり二せの誓ひの約束も忘れて
待つとあっても歌ひ来の
ざるに年月は流れの
実之下ノ巻

の為に歌さんと多の破滅を拵へ昔も
今も捨てるものに見を惜しく嘆く
仮婚ホ実とうとと数茶せ〜ようと二代め
高尾丈に廓へ寄ると稼ぐ
さいひに死生は色とい人大きに
ちる落〜完ありてそうと見ふ
出て追実に谷まりて多の滅亡を拵へ
る我多の罪我多を考て人に恐をい

ぐうもあふぎ自業自得果の苦しみ逢うん
昆を怕れざうんや和車の反廻る城
えて後車のいましめとする所を変え
知らざる徐らしさのよめかそうる徐
子養の深斗を玉実侍と称ひ西とで
迷ふい苦て製造の科あふぎ輝い
身を咎ふひとて己惚のわるこそ最
可笑くれさんべ女ふの所詮ひるふかて

実三下ノ五

客の所詮ひるる多く女ふるもあるべ
見る出るを知て実ふす和金ふ
三金と別深源物の源発の業い跋扈
沙の深れふ義せられて苦海の波ふ渡
且芳嫁時る姿ふ死して金釜の
附めるす黄ふ鶏まる見るべし
侍製時の業ふを業ぎるふ
耶郭の一附の眠りるもあふぎ廿金年

のう紀法ともあらん孤の又る因とる可都うて
門流の妻曲尚在乃ふ合ゐの筆ぐん
正月の孤巫ようと大晦日の夜の排め
まで皆客人の懐中を的ちるべくめん日
物日の浮沉ぶ邪悪の波濤ふ紡せられて
紡ふ幸明の魂非天深ふるるうあき
ちず派中のくふ寓ふ深泊て拙ふ見
紡ふ珍方ちく紡卑を獻ず多を紡せ

実之下ノ六

一生の口腐を要ふ君十人ふ八九人いあり
紡ぐ中ふ偶紡稀の客人ふ清出されて
火宅の苦をきねげれ清涼の春う
罪ん者ふ百人ふ稀ちくべし元来ん
きくふ貪巫して造熱金苦のどもげう
正路ふ背きて王独のいくしゆをちくべ
紀紡りゆきしふ人を嘉むき術らうせる
厭分ふ酔ひて一生ぐう之の揚ぐき孤

も作りも呉し呉さるハ我身一人もあふ
ぎんべ美て美悟のうへ〳〵さるべし〳〵さかく
都を離れてさるべく東と東のさてまぐも
東りゆるうきくも美海のきさよ沉むる
抜うきる玄の絡さくうれべ愛さふふの
安音きく〳〵も空しく叶うまむ〳〵ふ実途
美うあん美の張ふも場れる世〳〵さハ義美
の雲を美ハ洞美の心を求むうるも

実三下ノ七

さ我さうさ死身を世然作ふう任せん
最ん細さの限りきし 鄭幸さ死
仕合せを作るる空も一道地生のよう
合イ洞のためる帯でさうう たハ
玄うぐふ見を美ふ為こふふ心めうべ
平附作さまるべうもあふ若智果の
合歓あふべ持ふ車の奇代難鄭洞
の持ぐんのとの〳〵ふ美り後の

ぼくと世の人々の因果みてせう
ちうちうたるものをきるものと人間城
の為て悪人哭キ鬼ひ不移らす口惜サ
難面古地と帰わて金を金と言るよう
外ふ他ちる未練ハちうう
愛情と呼れて人の魂を
金で買れる身うを使ふうれ

実之下ノ八

ひちうう戸ゞ戦云のむゞ書を関るもの
その奏剣を奪て仇嬢の雪
と評判せ〜ようう行の場の分限者ふ信
出きんて生涯安楽の星霜をふるし
とうや見おい方ゞ稀のるわ〜て然く
果敢めでうたる身のうへちうゞしうのうん
幸明の業を殺ぎんみて迷惑ハ考ふ
お情ものうゞし

今いむらしは廓ホ十八大通と唱る
金瓶寛作る狭客ありそのうちう
文魚と唱る者二人勉曉と唱る者二人
あり義まくの文魚深川の文魚笠屋
の勉曉山谷の勉曉といふ幸ひの砌
月淺茅の鶏雨は和都合十八人うち
いづれも人品骨がらよく自然と威あり
て種うふび素者万象多ホ抜うて押出

実三下ノ九

の足宮しきい一人もうつ十八大通の
孫倫ホ夫如ク実ハ母の小児を育るが
ごとく一生一義忠の為ゝを強さぶれば
吋も形立るものそのいろ〳〵浦き中
みも又行業強の折種ありて母の威
光を足まるものあり都て下卷さの命
まら立出るるもの一ツの方使うゝ結
我子の為ゝれば道とちく慣むんへ

ろ
男てう〳〵寄ふおのてこんみる母の義
忠のあり難きを天慈と称して骨肉
義業しる場〳〵如うんも彼の
ごく小児を抱へん持ちて石るの
義忠のゆづりを加へきづいらする剃髪未
拘の奚情とりへともの客を意義ん
るうこゞひち〳〵元弟如ふ実ち〳〵と
いるも客ふ実ちゆ〳〵きう客へふ

実之下ノ十

しん実の信あんべ如ふん小児の母を寄へが
ごく二人のあるべき乃理ふ来てきしと
いるふ奚情の多ふりて君ありゞゝ元
通倫ちう如ふの信を寄〳〵出実を
別ちすまで実義ざる客の偽りを弟
むる者ちゝ元こそ是非もち〳〵
今ふむう〳〵紅戸町若名屋の抱へ抱女ふ
雨雲の白妙とうる俗妓ありる形

節墨天鵞絨ふ金糸で雨絡を縫し
箱を著て仲の町へ出る時八天俄ふ捨
墨り大雨東北を流せり〳〵
怕まをきして雨雲の白妙と黒ぜり
稼〳〵きをつて悔〳〵きとせざれば悔しき
るもきと〳〵ども眼前りみけふ〳〵だを
形をるのいきるれ而ちると思れね
ものいきりりをも〳〵白妙ぶけ箱を

実之下り土

物のひ立〳〵始めより出氣山の聖でん
成田のふ勧まく〳〵泥形塩形〳〵と載
絵の日のきどめから仕立上々日の絵り
まで精進潔斎して寺坊の現まん
るを立形きく〳〵巳又出発よりく拵
束まるより手拭の〳〵ふ帰り切史を
もつて解多交清夫より神酒を
供へく雨彩夫稼現と墨めまり一

七日祇園の御輿を修行して出る
供奉の行列念をたのし影のごく
してさびしくて仲の町へ出るに
あらふしだや時雨のそぼふり合もなく
雲立くる村雨の音しきりふる
線と白物いん張の帯しめふる
るをんの屋ふ大きふ表びいきく
傾ん意ふりまく丹波の行念ふ

実三下ノ十二

ざりまるれば袖を絞て出る表び
毎ふ四季を倫せず俄ふ雨の降
るれば人中ふ堂の行念ふまるば
祇園ふりぎの寿場あるふ矢ふ凡
人の不ふあふび紅口のむ心合る
手紙書哭ぶるの来まるるとも
刮を老てで男れ合イクり人ふ祇園
ともるるさ人尾ふ尾を分ケて最

げ〻しく
行〻義なるすゝ中ゝ沒んや眼耳鼻舌の
ふ〻ぎの現〻を見て彼面影ゝ古法
眼元信が畫きるよう絵人ゝ来新
西陣の織物師結搭紀後の太掘
きりと妙に覺きるものゝさが他文を
乗〻られを出すのも出織ゝて
又人〻不見を彷〻きうふさ死ゝハヤて
紅十文字ゝ獣獣て悪名屋の白

実三下ノ十三

妙ゝ書吟さろの紀定きるう
たぐひきりもの他拙ゝ自然ゝ本年
ふう完明を新ちてあ〻ゝの表通非
ある絡緯〻ゝと来もるき鳥使妻徹
武玉解せ〻ようう出写山の性宣上人
あゝゝ西形結作ゝ号〻き智徹老
の出家の和を思びて色ぎとのゝ浄を
獣ハぎコぎ〻〻寄ゝて白妙ゝ

財産を費し礼儀を重
んじて立居しかも舞ふしくも又あり難
き書籍あり辰巳のさとれ
ばさる者のちり幸をとるよう
金銀ふ多くるる徳者の金帛ちりん
ぐんと夫婦の繋りを結びいよく多
き夫ちん業の基ひと勤ふ限りの志
ものふ引ふ勤まの客ふ仏妙も人ふ

実三千ノ十七

積んん〜世のひたきの巣ども巣ぐん
むらふ〜ふぶ〜と僥倖をひろる徳人ふ
銭長者天ふ動ぎるの美名ふ拠りの
ちりと日ちを利して一つも少しの
多きうちと人の徳めの元ちべと
去大ふ徳ふ出されて因出元多のく
らぐ多ふ〜ふ
摘菓や世〜元元の持られず

今はむかし玉屋の彦とゝるおのれ
探枝玉つて　魂〳〵風ぞくも立うすく
氣を尋ねるがごとく　廓中に秀て学
勉ふ万なる　契情まりしがいうなる　婚姻
の妙術を　はつかしあや　高雲緑のある
る　絹かの東のごとく　金屏　双びなれば
美姫を　数むき　雪美人を　壁　仍ぬも
比類　が　右ふ　ものなる　外　ずに　是を　抜くべ

実三下ノ十八

容貌の　若　恐　拘　べ　ば　若の
金　軽　雪　蕊　の　一　美　ふ　抽　の　ん　ば
ふ　類　玉　屋　の　家　名　い　ふ　〳〵　著　べ　〳〵
世　万　ふ　流　布　し　て　緑　判　の　ま　う　し　も
雲　緑　奇　緑　と　謂　ひ　べ　〳〵　契　情　の　角　の
美　宋　ち　き　る　ま　い　抽　の　人　ふ　配　偶　で　抽　の　ふ　ね
ふ　緑　ふ　も　緑　ち　ふ　ま　ま　う　る　の　が　ち　ひ　ん
出　雲　の　神　の　古　絶　宣　ち　る　べ　〳〵

釈の美足い必ねども為る晒落幸を
必ずに然年ふいるさんどもうんの多くて
我分のうくとも釈ふさんべいさぼうるると
ちうぬ仮初ちぐふ他る文るの丁拾く
可知き中ども強んど勧懲の意味
あんべうくを徳分解ちべ釈の
美足ある場ちぐ

通とちぶんふ通とちうく多を
金ふまぐ輝と呼んて物ひ付く
ちういぶ粋といちんて物ひ付れぬが
我分の仕合セうを生涯の愛ふくい
ぶうふありて拙子柄のたぐちくを
ちるるあぶん悟るべく

実之巻之編之終

4年 7月

実之下ノ十七